

啐啄同機



大阪市立榎本小学校

6月29日

NO、12

個性とは

「大造じいさんとがん」皆さんもお読みになったことがあると思います。書いたのは椋鳩十さんです。椋さんの講演会を文字に起こした書籍にタイトルが「感動が心の扉を開く」というものがあります。

その書籍には、動物作家というレッテルを貼られたことに対する不満が述べられていました。椋氏が進んで動物の姿を書いていると思われていたようですが、事実は違ったようです。依頼の多くが動物を扱ったものだったので、動物の姿を描いたそうです。

依頼に応えるために、椋氏は徹底的に動物を調べてそうです。そして、動物の不思議な能力に興味を持ちました。

百万分の一の超音波を操って獲物を捕らえるコウモリや敵から身を守るために自らのしっぽを切り離すトカゲ。生き残るために不思議な力を持たない生き物はいないと椋氏は言います。

では、人間はどうなのか？__

人間にも動物と同じように不思議な力が与えられていると椋氏は言います。その不思議な力とは何なのか。それは「個性」という力だそうです。

個性的なコウモリやトカゲはいません。動物は、同じ種類であるならば同じ力しか与えられていません。

人間には個性があり、一人としてまったく同じ人間はいない。一人一人の違う力、それが個性です。個性は、才能とも呼ばれます。人は必ず何かを持っている。人には人それぞれの才能があります。ただ、その才能に気づいている人は少ない。才能は心の奥の方にグーっと沈んでいる。なかなか表には出てきてはくれない。

椋さんの「感動が心の扉を開く」には、残念ながら自分の才能に気がつき、開花させる方法については書かれていません。逆に才能にふたをする方法は書かれています。それは、子どもに「お前はだめだ」という気持ちを植え付けることだと言います。劣等感を子どもに与え続ければ、才能の出口に蓋ができるそうです。

ただ、その蓋を取り除く方法は書いてくれています。その方法とは、感動を与えること、それが唯一の方法だと言います。感動の方向に人の心は変わる。だから、良質の感動を与えることが大事だと書かれています。

子どもの持つ才能を開花させるためにも、多くのことに挑戦させ、たくさんの感動を与えたいものです。

